



『映画教室』一九四八年七月号 (日本映画教育協会)

## 新教育に映画をどう使うか

矢口 新

人を育てるにはさまざまの材料や道具を使ってするのである。教科書・教具などといわれるのは、そういう人を育てるに使われるものの一つである。所がこれまで、われわれはこんな簡単なことでもはつきりと自覚していなかった。われわれは教科書を教えて、それが教育だと思ひこんでいた。併し教科書を教えるのではない。教育とは人を育てることである。人を育てるためには様々な方法がある。いろいろな方法を使って育てるのである。その一つに教科書を使うという方法もあるというに過ぎない。教育を、即ち人を育てるということを、本当に生きいきと行うためには教科書を教えるという考えから脱却しなくてはならない。

映画が教育の中に入って来てから長い年月が立つけれども、此の頃になって漸くその正しい使われ方が自覚されて来たようである。是迄の映画は教育の中でどういふものとして使われていたであろうか。先年来朝した米國教育使節団に日本の教育の事情を紹介するために司令部で作製した「日本に於ける教育」という冊子の中にこういう意味のことがある。日本で映画は教育の中に相当使われているけれども、それは教科書の中に書かれてあることをより一層確実にするために見せるものとして使われているに過ぎないと。これは映画が従来の教科書教育方式の中にあつて如何に使われていたかを示す言葉である。そうして第三の眼といわれる映画も、これまでのような教育の方式の中にあつては本来の意義を發揮して行くことが出来ないということ表

している。

教科書を教えるというのは、人を育てる中でただ一種の知識を与えるということ果しているに過ぎない。映画はその補助具として従来使われていたのである。人を育てるといふ自覚に立つならば、教科書もまたさまざまに使われ方がある。知識を羅列したようなものがそれを覚えるために読まれるということではなく、子供が生活してゆく様々な場合に採り入れられて、或る時は物を知ることもあるうし、或る時は考え方の参考にする場合もあるうし或る時は情緒にひたる場合もあるう。そのためには教科書の作り方が変化しなくてはならぬであらうが、ともかくこうして人を育てる場合随時使われるようなものとなるであらう。

そうなつた場合映画はもはや単なる教科書を覚えこませるために見せるという如きものではない。映画に限らず、一切の教具がそれぞれの独自の意義機能から教育の中に採り入れられて来なくてはならない。われわれの生活の中にあるものはすべて教育の中に採り入れられてよい。人は単に知識のみによつて育つのではない。道具も機械もすべて人を育てるものなのである。

映画を、人を育てるために使おうとすると今後の教育に於ける映画のあり方が考えられて来る。教科書を教えるための補助として使われた映画は映画の本質的なあり方を無視して、単にその知識の面だけを取り扱っていたのである。いわば教科書を教えようというこ

とのおなじく映画の中に描かれた事を覚えさせようとしていたのである。誠に奇妙な言い方であるが、映画を覚えさせようとしていた教育が従来の映画教育の主たる方向であったのである。映画を教科書から独立したものと、独自の意義を主張する考え方であっても、依然として従来の教科書の位置の所へ映画をすえただけであって、それは結局教科書のかわりに映画を見せて行う知識教育にすぎなかったといえよう。

従来教室で映画を使っていたのを見ると、大部分は映画をみせてよく覚えさせるようにする方法か、或はみせて感想を聞くという程度であった。子供達は映画をみたあとで、あそこに何があった、どこにどうあったという事を思い出して覚えるために整理をするのである。或はそこまで整理をしない場合はせいぜい全体としてわかったかどうか、どういう所がよかったかを作文にでもするのである。この場合は一般に街の映画館で映画をみるかわりに学校で多少教育的なものを見るという程度の差である。これは映画を教育に使って行くということからはだいぶ隔りがあるといわなくてはならぬ。

これから後の映画を教育に使う方式はどういう方式であろうか。それは子供が学習活動しながら教科書や参考読物をどういう形でその活動の中にとりこんで来るかを考えてみればよい。子供達は自分の課題を発見してこれを解決するために学習するのである。そのためには子供は社会の現場へも出て行かなくてはならぬ。また多くの読物を参考にするのである。大人が問題を解決する時と同様に、或は辞典をひき、或は現場をみ、或は計算し、或は製作し、或は人の意見をきき、或は様々な専門書をひもどきつつ課題を解決して行くのである。そういう場合に学校文庫や学級文庫が豊かに取り揃えられてあって、子供は自らこれをひもどいて行くことが出来れば、すぐれた学習となるであろう。この場合に学級文庫や学校文庫は問題解決の端緒をつかむ材料となり、或は人間の心情に対する理解を得させ、或は現実の中に動

く法則的考え方を会得させ、或は問題解決のために必要な知識を与えたりするであろう。

第三の眼としての映画も、その使用される形式はやはりかくの如くでなくてはならない。文庫とおなじように、フィルム・ライブラリーが設けられてあって、そこにはどういう内容のどういう映画があるかが子供に一覧出来るようになっていく。子供は問題をもって文庫で書物をさがすと同じように映画をさがす。およその見当をつけてこれを映写してみる。その結果参考として使えるということが明らかになれば、それをもって来て更に詳しく分析的に見る。一つの学習に様々な参考書を使うとおなじく、或は参考書の一部を使用するのみの場合もあるように、様々な何本もの映画を使用し、また或る一部分だけを使用しつつ子供は学習を進展させて行くのである。

かくの如き形で映画を使用する体制がとれるならば、はじめて人を育てる本質的な教育が出現するのである。映画のみでなくもちろん多くの教材教具が何れもかく使われるということになるべきであるが、就中映画は重要な役割を果すであろう。こうなった時、映画が他の教具と異なつてその本質的意義を発揮する場面はどういう所にあるであろうか。

先日朝日新聞社主催の映画放送教育研究会に於て発表された三人の先生方の研究はその点に就いて幾多の示唆を与えるものである。その一つは赤羽小学校の服部先生の発表であつたが、これはモティベーションに使用した例であつた。天然資源の保護に関する学習であったが、そもそも天然資源とは何であるか、何故保護しなくてはならぬか、子供達はどの辺から大きな問題に衝突したのであつた。そこでわれわれの産業生活や日常生活に役割を果たしている天然資源を取扱った映画が七八本も子供達に見せられた。「石炭」とか「製鉄」とか、「せともの」とか様々な生活の現実を描いた映画は具象的に資源の意義をつかまえたのである。そこには物量感もあり、ダイナミック

な、直観的な描写があつて、これが子供の学習意欲を刺激し、以後の学習を進展させる地盤となつたのである。かくの如き役割は映画ならでは果し得ない所のものであつた。

桜田小学校の室井先生によつて発表されたものは、新聞の学習に於ける紙の製造工程の所に使用された研究報告であつた。「紙」という映画は紙の製作工程の描写であるが、新聞用紙の研究の中にいわば副次的に採り入れられたものである。最近現場で学習する事が盛んに言われ、その為になだむやみに現場に出かけて行くが、何の準備もなく行く所から折角出かけて行つても要領を得ないで時間の浪費が著しいのである。事実大人でもはじめて工場へ行つた程度では何のことも要領を得ないでいる事が多いのである。この紙の生産工程を描いた映画はこの点誠に恰好のものであつた。生産工程などというものは、むしろかくの如き映画によつて、要点がピックアップされてはじめて一連のまとまつたものとして理解し得るのである。まとまりのない、構成されていない工場の中ではとらえられないものを、この映画からつかみ出している。この映画から子供の製作工程をつかみ出すために五六回の映写をしたのであるが、そういう点も映画のもつ独特の長所であつた。

第三に北原小学校の高橋先生によつて行われた研究は、映画によつて働く人間の心情を子供が分析する学習であつた。「炭抗」と「機関車物語」の二つの映画が使用されたが、これは働く人々の活動の実状を極めてよく描いたものであつた。凡そ人間の活動の背後にかくれている心情などというものは子供にとつても大人にとつても極めてとらえにくいものである。人の世のよくわかつた人というのはその点がかみわけられた人の事をいうのであろう。こういうものは理屈ではないのであつて、知識を羅列した教科書によつて到底得られる所ではない。モニターによつて構成された映画の如きものによつてはじめて、こういう点を子供にもさとらせることが出来るのである。何回も

何回も映写しつつ、各場面の意義を分析して、この背後の人間の心情へ迫つて行く子供の学習活動をみているのは面白かつた。これもまた映画の使用される本質的な意義を示すものであつた。

若し今後子供が自ら映画を作製する如き活動が行われるならば、これはその過程に於て人間のさまざまのリアルにとり組むことによつて、真に社会を理解し、現実的に活動し得る底力を子供の身につけさせることになる。映画を教育に使う事の最高の段階は、まさに子供自ら映画を作製する所にあると言わなくてはならぬ。

かくの如く映画を使用する教育が円滑に行われるためには、子供は映画の見方についても学習しなくてはならない。恰も国語を使って社会科や理科の内容を学習するように、内容学習に映画が使われるためには、用具として映画を使えるように子供達が訓練されて行く必要があるのである。曾つて映画を教育するのか、それとも映画を何か他の目的のために使うのか等という問題が論ぜられた事があつたけれども、それらの問題はまさにこの用具と内容との関係によつて解決されるであらう。あらゆるものは結局人間の生活の発展に使われるべきである。人間に使われるべきものである。われわれの生活の中にある文化財はわれわれ人間を進展させるために使われなくてはならぬのであつて、それが人間に何らか強制を加えることがあつてはおかしいのである。教育に於ても一切の文化財を人間を育てるために使おうとするにとよつて、はじめて真の発展があるといわなくてはならぬ。

映画の如き生活文化財のすぐれたものが、教育に豊かにとり入れられるによつて、はじめて新教育も成り立つのである。こういう豊かな新教育を成立せしめることが、われわれにとつての課題なのである。

(筆者・中央教育研究所)